

小深田遺跡
下長橋遺跡
発掘調査報告書

1989

山形県
山形県教育委員会

こ ふか だ
小 深 田 遺 跡
しも なが はし
下 長 橋 遺 跡
発掘調査報告書

平成元年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した県営灌漑排水事業（月光川地区）に伴う遊佐町小深田遺跡および下長橋遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査では平安時代の集落跡の一端と考えられる遺構と、それらから出土した多数の遺物が発見され、月光川を背景とする古代の生活内容が伺い知れ、出羽の国にかかる貴重な資料を得ることができました。これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で融和一体となりながら、新しい文化を創造し育んできたものであります。これらを理解し愛護することは、先人の歴史を知ると同時に今日の文化を見つめる事にも繋がると思われます。

近年、埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。本県の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊かな県土を造りあげていくことは必要なことがあります。一方、開発事業を進めることは数千年もの間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と直接なかかわりを持ち、両者の間には困難な問題も山積みの状況であります。しかし、生活文化を向上とする同じ立場から諸問題を調整し、埋蔵文化財を長く後世に伝え残していくことが私達の重要な責務であると考え、今後とも保護行政のため努力を続けてまいる所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって多くの御協力をいただきました地元の方々をはじめ、遊佐町、遊佐町教育委員会、庄内教育事務所、月光川土地改良事務所、月光川土地改良区の関係各機関に対し、感謝を申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いと存じます。

平成元年3月

山形県教育委員会
教育長 木場 清耕

例　　言

1. 本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて、昭和63年度に実施した県営灌漑排水事業（月光川地区）に係る小深田遺跡（山形県遺跡地図2076）、下長橋遺跡（同2182）の緊急発掘調査報告書である。

2. 発掘調査の期間は以下の通りである。

小深田遺跡 昭和63年5月16日～6月24日（延29日間）

下長橋遺跡 昭和63年7月18日～7月29日（延9日間）

3. 遺跡の所在地は以下の通りである。

小深田遺跡 山形県飽海郡遊佐町大字遊佐町字小深田 他

下長橋遺跡 山形県飽海郡遊佐町大字小原田字村西 他

4. 発掘調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）

同 佐藤 庄一（ 同 埋蔵文化財係長）

同・小深田遺跡現場主任 野尻 侃（ 同 主任技師）

下長橋遺跡現場主任 名和 達朗（ 同 技師）

調査員 池田 茂 月山 隆弘 須賀井新人

事務局長 後藤 茂綱（山形県教育庁文化課 課長）

事務局長補佐 土門 紹徳（ 同 課長補佐）

事務局員 長谷部恵子・高橋 春雄

5. 発掘調査にあたっては、遊佐町教育委員会、庄内教育事務所、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所・月光川土地改良事務所・月光川土地改良区・遊佐町尻引調田地区他関係機関より多くの御指導、御協力をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。

6. 本書の作成は小深田遺跡を野尻 侃・須賀井新人、下長橋遺跡を名和達朗・月山隆弘が担当した。挿図・図版の作成には小深田遺跡・松浦美幸・遠藤淑子・三浦節子・鈴木良子・塩野美穂・滝井江里、下長橋遺跡は高崎くに子・三沢友子・吉田直子・遠藤京子・西村純子・山内知恵子がこれを補佐した。編集は阿部明彦・野尻・名和が担当し、佐々木洋治が総括した。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 小深田遺跡	
1 遺跡の概観	
(1) 遺跡の立地と環境	3
(2) 遺構と遺物の分布	3
2 検出遺構	
(1) 土 壤	5
(2) 溝状遺構	6
3 出土遺物	
(1) 遺構内出土遺物	7
(2) 包含層出土遺物	11
III 下長橋遺跡	
1 遺跡の概観	14
2 遺構と遺物	16
IV まとめ	20

付 表 目 次

表1 周辺の遺跡	2
表2 出土遺物点数表（小深田遺跡）	7
表3 出土遺物観察表（小深田遺跡）	13
表4 遺構計測表（下長橋遺跡）	16
表5 土器観察表（下長橋遺跡）	16

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
小深田遺跡	
第2図 遺跡の層序	4
第3図 トレンチ配置図	4
第4図 遺構配置図	4
第5図 S K50・58・60・65・66土壤	5
第6図 S K68・79・80土壤	6
第7図 S D77溝状遺構	7
第8図 土壌内出土土器	8
第9図 溝状遺構出土土器(1)	9
第10図 溝状遺構出土土器(2)	10
第11図 溝状遺構出土土器(3)	11
第12図 包含層出土土器・古錢	12
下長橋遺跡	
第13図 遺構配置図	14
第14図 遺跡全体図・土層柱状図	15
第15図 遺構実測図(1)	17
第16図 遺構実測図(2)	18
第17図 出土土器実測図	19

図版目次

小深田遺跡

図版1 遺跡遠景 遺跡近景 調査区設定
図版2 調査区全景 調査風景
図版3 遺跡の層序 遺構検出状況
図版4 S K60・65・66・68・79・80土壤 S D77溝状遺構 R P 1・2 遺物出土状況
図版5 R P 3・4 遺物出土状況 完掘状況
図版6 出土土器(1)
図版7 出土土器(2)
図版8 出土土器・古錢

下長橋遺跡

図版9 遺跡遠景(南西から) 調査前状況(北西から) 調査前状況(東から) トレンチ調査状況(東から) 調査トレンチ(S D 4付近) 調査トレンチ(S K 1付近) 調査トレンチ (西から) 土層断面
図版10 S K 1 S K 1 土層断面
図版11 S K 2 S K 2 土層断面
図版12 S D 4 S K 3 S D 4 土層断面 S D 9 S D 10
図版13 出土土器(1)
図版14 出土土器(2)

凡　例

1. 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

S K……土壤 S D……溝状遺構 E B……柱穴 E P……小穴
S X……性格不明遺構
2. 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
3. 遺物に付した記号は、R P（土器・土製品）、R Q（石製品）、R M（金属製品）であり、検出順にしたがって番号を付した。
4. 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 挿図中における方位は磁北を示している。調査トレンチでの軸線は、小深田遺跡がN-18°-Eを、下長橋遺跡がN-71°30'-Wを測る。なお溝状遺構についてはその中心線を測定した。
 - (2) 遺構平面図は $\frac{1}{40}$ ～ $\frac{1}{100}$ 他の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (3) 遺物実測図・拓影図・図版は原則的に約 $\frac{1}{10}$ で採録し、各々にスケールを付した。
 - (4) 土器実測図・拓影図の断面では、白ヌキが土師器、●印が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表わしている。また土師器で内面に黒色化処理を施されている土器については内面に網点を入れた。
 - (5) 遺物観察表中の計測値欄で、()内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では「F」は遺構内覆土出土を示し、その数字は上位からの序列を表わす。また遺跡を覆う基本層序はローマ数字「I～IV」等で表わした。
 - (6) 遺物写真は原則的に小形の坏・甕類が $\frac{1}{10}$ 、破片資料が $\frac{1}{10}$ としている。
 - (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。
 - (8) 報告書内の挿図では、第2図～第12図までが小深田遺跡、第13図～第17図までが下長橋遺跡、図版中では、図版1～図版8までを小深田遺跡、図版9～図版14までを下長橋遺跡と区分した。
 - (9) 出土遺物については、山形県教育委員会で一括保管している。

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

庄内平野の北部、秋田県との県境を分ける海拔2,237mの鳥海山はその端麗な姿から「出羽富士」と呼び親われている。この鳥海山の南麓に広がる平野部は鳥海山系を源流とする中小の河川によって潤される。その中の月光川は平野部へ広範な扇状地を形成し、肥沃な土地を造っている。この平野部には数多くの遺跡が点在し、山形県内市町村教育委員会が確認、登録している内でも本遺跡が所在する鮑海郡遊佐町は、遺跡数が昭和53年度発行の「山形県遺跡地図」(註1)の中で、167ヵ所と数多くの遺跡を有する地域として知られている。

ここに昭和63年度県営灌漑排水事業(月光川地区)が計画され、県農林水産部より昭和62年度に本事業にかかる遺跡の詳細分布調査が依頼された。分布調査は事業計画部分を中心に遺跡の範囲・性格・内容を更に詳細に把握することに努めた。その結果、小深田遺跡では遺跡中心部を南北に、下長橋遺跡は遺跡南部を東西に事業が通ることが判明した。(註2)この調査結果を基に山形県教育委員会では、文化財保護の立場から県農林水産部、遊佐町教育委員会等、関係諸機関と協議を重ねた結果、昭和63年度に緊急発掘調査を実施し、記録による保存を図ることとなった。

調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県埋蔵文化財緊急調査団が調査を担当することとなった。調査の期間は、小深田遺跡を昭和63年5月16日から同年6月24日までの延29日間、下長橋遺跡を昭和63年7月18日から同年7月29日までの延9日間実施した。

2 調査の経過

発掘調査は昭和63年度県営灌漑排水事業施行予定の事業計画区域内を限定して始めた。調査を開始する際、事業主体となる月光川土地改良事務所とで工事施行上の問題や、調査日程等で協議を行ない、小深田遺跡では、流水の関わりから早期の開始を、下長橋遺跡では、稻作での澁水期以前の調査を要望された。このことにより、調査は小深田遺跡から始め、次に下長橋遺跡へと進めた。調査は当初、事業区内での遣構、遺物を探査し、重機による粗堀り作業で表土を除去し、その後手掘りによる面整理作業と精査作業を行なった。調査面積は小深田遺跡が幅6m、長さ330mの1,980m²、下長橋遺跡では幅3m、長さ100mの300m²である。精査作業では、小深田遺跡が溝状遣構、土壙、柱穴等、下長橋遺跡では同様に溝状遣構、土壙、柱穴等を検出し、平面図、断面図、写真等の記録作業を行なった。

また両遺跡の調査最終日には、関係機関に対して現地報告会を実施した。

註1 山形県教育委員会「山形県遺跡地図」1978

註2 名和達朗 他「分布調査報告書(15)」山形県埋蔵文化財調査報告書第119集 1988



第I図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

表 I 周辺の遺跡

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
1 小深田遺跡	集落跡	平安	12 道中A・B遺跡	集落跡	绳文・平安
2 下長橋遺跡	集落跡	平安	13 石田遺跡	集落跡	平安
3 浮橋遺跡	集落跡	平安末~鎌倉	14 宅田遺跡	集落跡	绳文・平安末~鎌倉
4 大橋遺跡	城郭跡	鎌倉	15 大坪遺跡	集落跡	平安
5 水尻遺跡	集落跡	平安末~鎌倉	16 三田遺跡	集落跡	平安末~鎌倉
6 前田遺跡	集落跡	平安	17 袋井遺跡	集落跡	平安末~鎌倉
7 地正面遺跡	集落跡	平安	18 仁田山遺跡	集落跡	绳文・平安末~鎌倉
8 保田遺跡	集落跡	平安	19 北子橋下遺跡	集落跡	平安末~鎌倉
9 佐渡遺跡	集落跡	平安	20 天狗森C窯跡	窯跡	平安
10 長田遺跡	集落跡	平安末~鎌倉	21 堂林A遺跡	墓葬跡・窯跡	绳文
11 富の下遺跡	集落跡	绳文・平安	22 間岡遺跡	城郭跡	平安以降

II 小深田遺跡

I 遺跡の概観

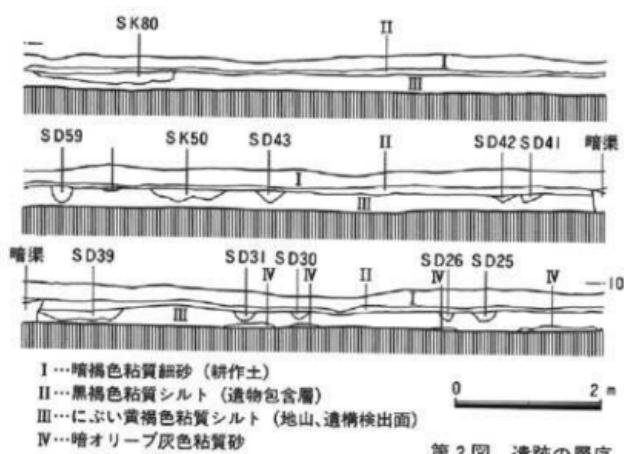
(1) 遺跡の立地と環境

小深田遺跡の位置する山形県飽海郡遊佐町は、東に出羽丘陵、西に庄内北部砂丘、さらに北辺を出羽富士鳥海の山並で囲まれ、古代出羽国の中核を成す飽海平野の北半を占める。平野部には鳥海山麓や出羽丘陵に源を発する日向川・月光川・高瀬川の各河川が微地形を形成しながら日本海へと注いでいる。JR東日本羽越本線遊佐駅西側一帯の東西550m、南北600mの範囲に広がる本遺跡は、月光川左岸の水田中に立地し標高は約10mを測る。遺跡が営まれていた頃は現在のように平坦な地ではなく、月光川の蛇行によって自然堤防や後背湿地が形成され、周囲より一段高い微高地であったものと考えられる。

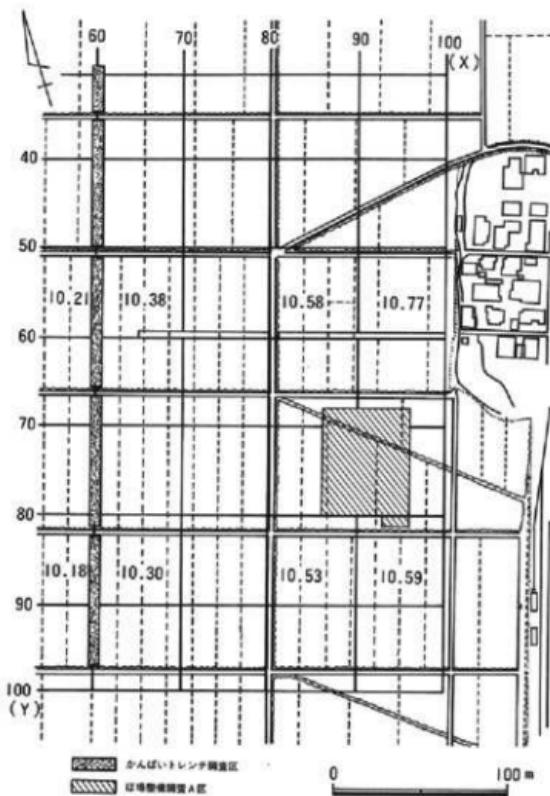
遊佐町には本遺跡をはじめ、167ヵ所の遺跡が確認されており、時代も旧石器時代から中世・江戸時代までの長い間に亘っている。昭和58年度から第4次までの調査が行なわれた吹浦遺跡は、縄文時代の堅穴式住居跡やフ拉斯コ状土壙、平安時代の建物跡などが発見され、縄文前期末葉と平安前半の大集落であることが明らかとなった。その他では平野部や川筋に沿って平安時代から鎌倉時代の遺跡が点在し、山麓部には館跡や窯跡が存在する。本遺跡周辺では今年度県教育委員会が調査を実施したものとして、浮橋遺跡・下長橋遺跡・大橋遺跡があり、発掘調査が進むにつれて庄内地方の古代の様子や生活状況がしだいに明らかとなっている。

(2) 遺構と遺物の分布

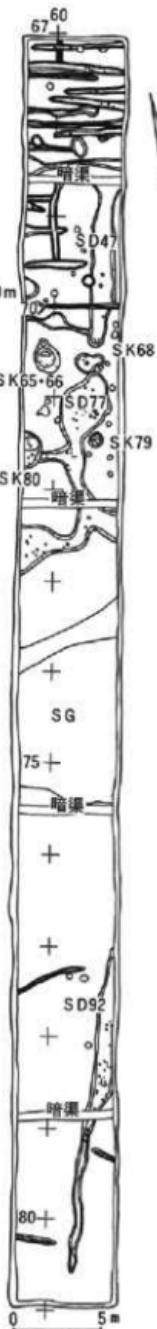
発掘調査は幅6m、長さ330mのトレンチ掘りを実施し、1,980m²について調査を行なった。北半部は北進するにつれ地山層が下がり、強粘質土がしだいに厚くなるうえ基盤層も含め攪乱を受けており、遺構の検出は不可能で、出土遺物は散乱した破片のみであった。南半部は南へ向かって基盤層が低くなるものの、遺存状態良好な遺物包含層が確認され、特に59・60・67~81グリッド（精査区）では集中して遺構が発見された。検出遺構は土壙15基、溝状遺構27条、旧河川の一部と多数のピット等、登録された遺構は75を数える。検出状況の特徴は、精査区の中央部旧河川跡の北側に密集していることと、溝状遺構は東西に走るものとこれに直交する南北に走るもの2種類がある。これらは旧地形という立地環境に合わせて掘り込まれたものと推測される。遺物は整理箱にして8箱分の出土があり、その分布状況は遺構の密集度と軌を一にしている。種類では土器がほとんどであるが、石製品（碁石）、金属製品（元祐通寶）等が出土しており、総数2,972点に及ぶ。



第2図 遺跡の層序
 (59-60-62-71G断面)



第3図 トレンチ配置図

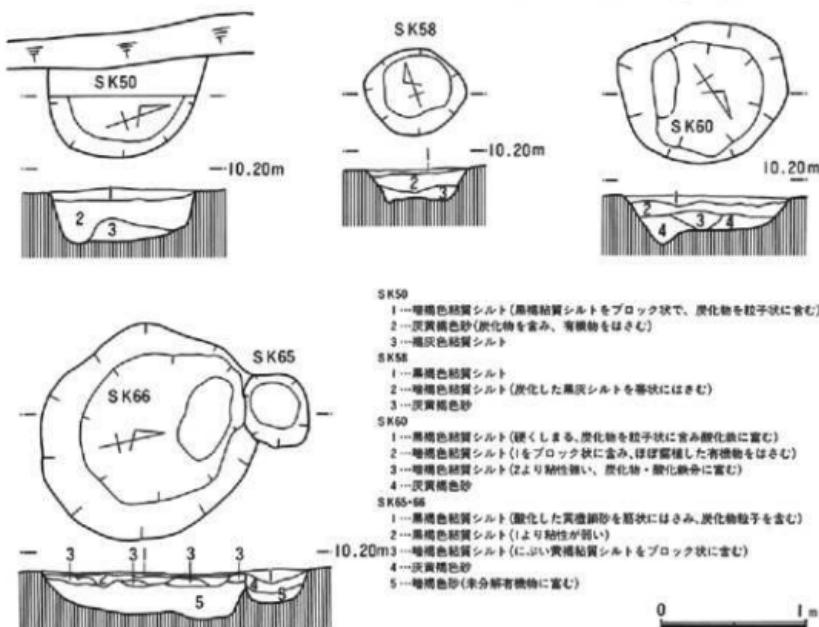


第4図 遺構配置図
 (59-60-62-71Gアリヤ)

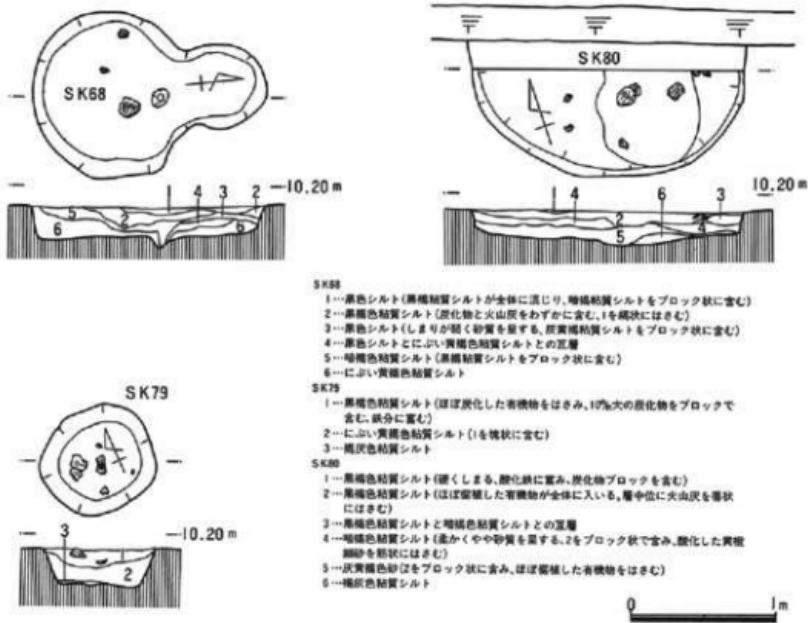
2 検出遺構

(1) 土壙 (第5・6図、図版4)

調査で土壙と確認され登録した数は15基を数える。これらは平面形や断面形からいくつかの形態に分類することができる。平面形が円形を呈するSK56・66土壙は検出面で重複して確認された。北に位置するSK65の規模は東西50cm、南北46cmでやや隅丸方形を呈する。検出面からの深さは23cmを測り、覆土は3層に分かれ。SK66は東西145cm、南北150cmで最深部まで31cmを測る。断面形はそれぞれ鍋形・船底形となり、土層観察から前者が後者を切っていることからSK65が新しいと判断される。SK80土壙は西縁部に沿って確認され東半分の検出であるが、長軸から190cm規模の円形と考えられる。底面は緩やかだが2段となり周壁の立ち上がりは急激である。覆土内からは44片の土器が出土した。平面形が隅丸方形を呈するものはSK58・60・79土壙である。SK58は66cm×60cm、断面形は船底形で、覆土は3層に分かれ自然堆積の様相を示す。SK60は118cm×96cm、南隅を欠く不整の隅丸方形を呈し、最深部で33cmを測る。覆土の堆積状況から土壙中央部で第3層を掘り込んだことが解かる(土層注記SK60の3)。SK79は78cm×70cm、深さ25cmで底面はほぼ平坦である。覆土第1層から赤焼土器片19点、第2層から須恵器・内黒・赤焼片が13点出土している。SK68土壙は平面形が双円形を呈す土壙である。規模は長軸が



第5図 SK50-58-60-65-66土壙



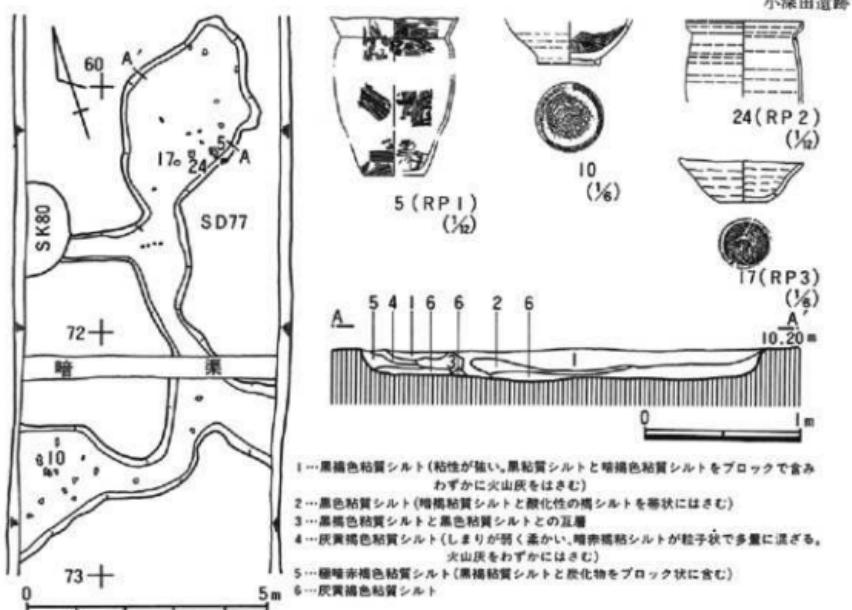
第6図 SK68・79・80土壤

160cm、短軸52cmで磁北に向かいゲルマ形を呈す。断面形は台形となり検出面より急激に掘り込んでいる。底面は平坦であるが、中央部で12~13cm径の窪み状の落ち込みをみると。覆土は6層で複雑に堆積しており、埋土堆積途中グライ化を受けたものと思われる。SK50土壤はSK80同様西縁部に位置し、検出された東半分から階円形を呈すると考えられる。深さは35cm、3層に分かれる覆土内から出土遺物は赤焼土器細片3点のみであった。

(2) 溝状遺構(第7図、図版4・5)

調査で確認された溝状遺構は27条を数える。そのほとんどが精査区北半部のY軸70グリッド以北に密集し、東西に掘り込まれた溝状遺構である。検出幅20~50cm、検出長2.5m以上で覆土は単層のものが多い。それらに直交し南北に主軸をもつ遺構はSD47・77他3条が確認され、遺物の多くはこれら南北に走る溝状遺構より出土した。

SD77溝状遺構は59・60-70~72グリッド田層上面で確認され、N-9°-Eに主軸方向をもつ南北に走る遺構であるが、検出南部では三差路形に分かれる。検出長12m、検出最大幅2.8m、深さ20cmを測る。底面は起伏があるもののほぼ平坦である。覆土は検出北部で6層、南部では8層に分かれ、北部覆土中からは部分的に火山灰が認められた。出土遺物は土器片だけであるが総計409点を数える。第9図5に示した土器片は検出部上面で出土しており流れ込みによると考えられ、時期は他の出土土器より9世紀前半と推定される。



第7図 SD 77溝状遺構

3 出土遺物

灌漑排水路調査区内から出土した遺物は整理箱にして総数8箱である。土器片がほとんどで、石製品、古銭が若干量の出土であった。遺物の総数は2,972片でそのうち遺構内からは1,268片で他は包含層出土及び表面採集の遺物である。種別では、土師器・須恵器・黒色土器・内黒土器・赤焼土器である。赤焼土器が2,341片と圧倒的に多い出土である。ここでは、遺構内出土遺物の中で時期や性格を示す遺物を中心に記述し、そのあと包含層出土を一括して述べる。

(1) 遺構内出土遺物 (表1、第8~10図、図版6・7)

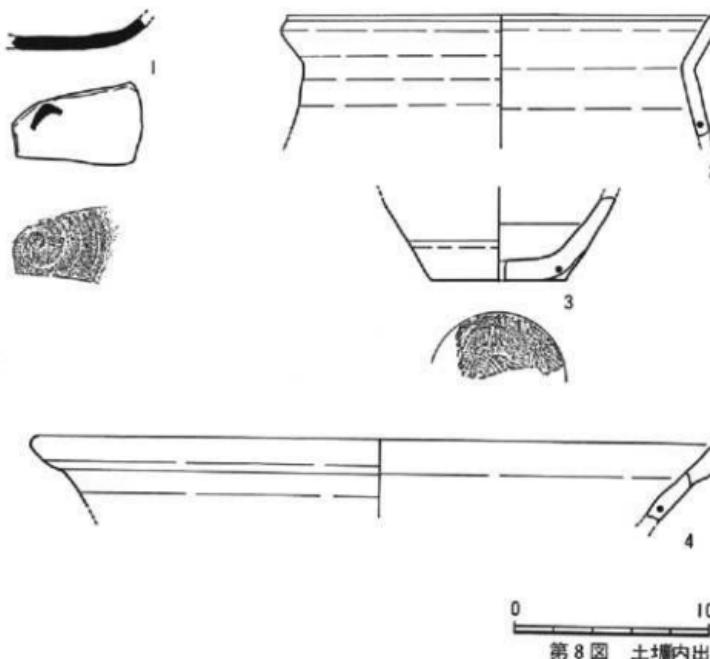
調査では溝状遺構・土壤が検出され、各々から遺物が出土した。以下に遺構毎に記述する。

表2 出土遺物点数表

出土地点	土師器	須恵器	黒色土器	内黒土器	赤焼土器	昭器	中鉢器	中鉢器	近鉢器	近鉢器	土製品	石製品	木製品	金属類	自動車	その他	計
S-D	12	103			58	956			1	2						1	1,133
S-K			7	1	6	112											126
S-X							2										2
E-P			4		1	3											8
包 含 層 II					2												2
III	1	370	2	39	1,262												1,674
IV		1				5	6	4	2	1	4	1	1	1	1	25	
X-D						1						1					2
合計	13	485	5	104	2,341		6	5	4	1	5		1	1	1		2,972

(2) 土壙内出土土器 (第8図、図版6、表3)

調査で確認された土壙は15基を数える。各土壙から須恵器・赤焼土器・内黒土器等、計126点の出土があった。第8図には、出土量の多いSK79土壙を主に墨痕がみえる土器片を出土したSK36土壙を載せた。1はSK36F₁層より出土した須恵器坏底部である。底部の切り離しを回転ヘラ切りを施こし、底部から体部にかけてゆるやかに立ち上がる器形を呈する。底部の墨書の書体は不明である。2~4はSK79土壙出土の土器である。2は赤焼土器腰片である。口縁部のみで、体部から「くの字状」に立ち上がり、口唇部が直立する。3は赤焼土器腰底部片である。底部の切り離しを回転糸切りとしているが、丸底としたのち

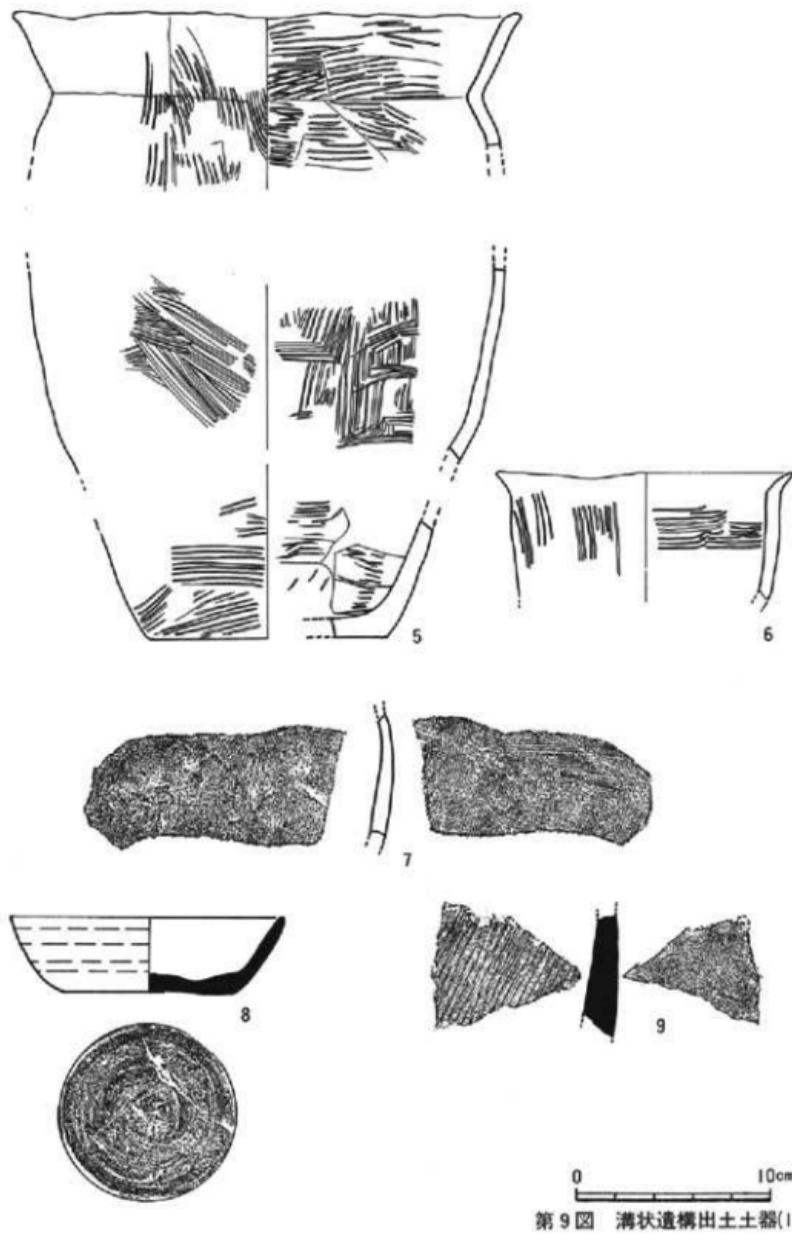


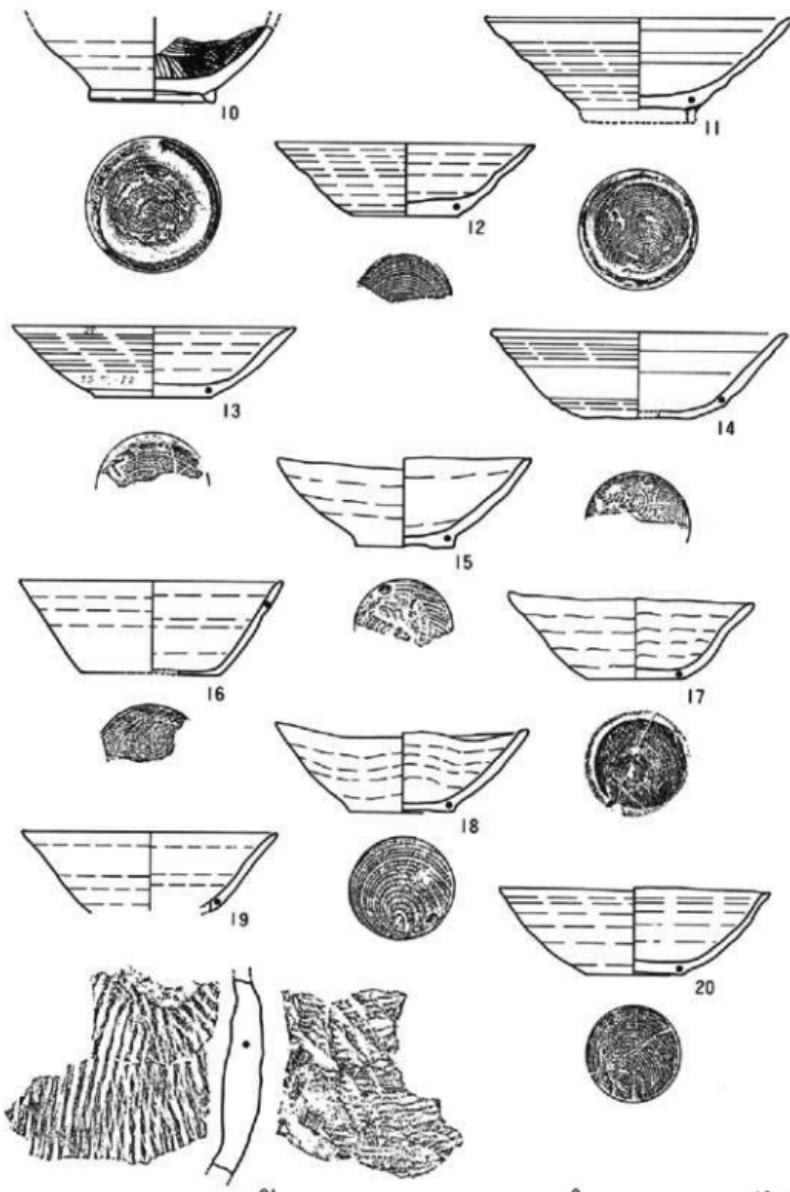
第8図 土壙内出土土器

底部周辺に粘土を張り付け平底としている。4は土壙口縁部片である。口径部が24cmを測る広い口径を呈する。

(3) 溝状遺構出土土器 (第9~11図、図版6・7、表3)

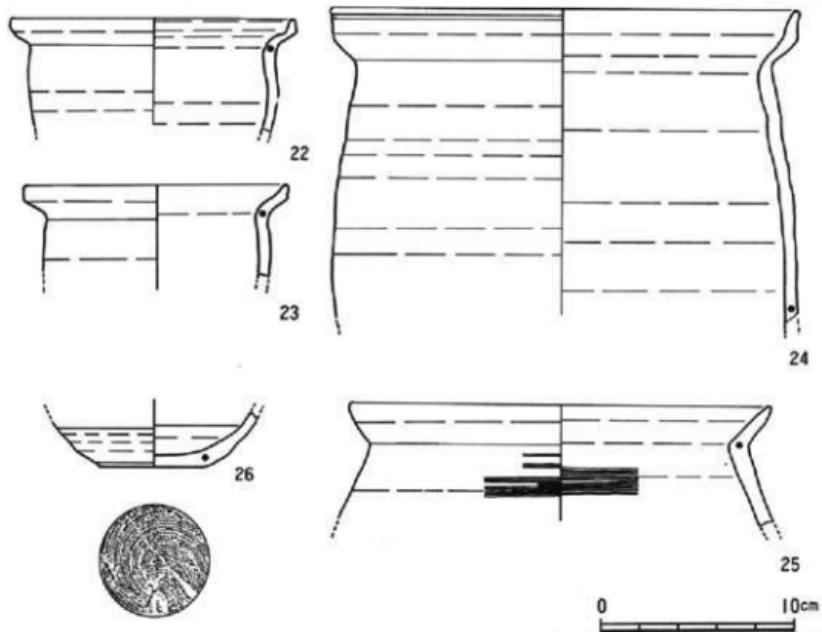
溝状遺構は16条検出された。各遺構からは多少を問わず遺物が出土している。出土遺物は時期や性格を反映しているものと考えられ、ここではSD25・61・77・84溝状遺構出土の遺物を図に入れた。遺構毎に記述する。





第10図 溝状造構出土土器(2)

0 10cm



第11図 溝状遺構出土土器(3)

S D 25からは20の赤焼土器坏が出土。底部の切り離しが回転糸切りである。器面にロクロ痕を残し、やや歪となる。5~7、10~19、21~25はS D77からの出土土器である。土師器（5~7）は、器面全体にハケ目調整が施され、7は細かなハケによる密な器面調整が施されている。11~20は赤焼土器坏である。11以外は平底で底部から体部にかけてやや丸味をもしながら立ち上がり、口唇部でやや外反する。21~25は同窯片である。21は表面を条線状タタキ、裏面を同アテ痕を残す。S D61からは8の須恵器坏が出土。底部の切り離しを回転ヘラ切り離し、底部がやや上げ底となる。S D84からは9の須恵器窯片が出土している。これら溝状遺構の時期は、出土土器により、S D25は11C前半、S D77は9Cから10C、S D61・84は10C前半に推測される。

(4) 包含層出土遺物（第12図、図版8、表3）

かんばい事業に係る小深田遺跡で調査された面積は約1,980m²の広さになる。重機械で粗掘された調査区内からは整理箱にして8箱の出土があった。第12図には時期や特徴を明示出来る遺物を図示した。須恵器（27~30）は甕・壺・坏が出土している。30の坏底部には字体不明の墨書きがみえる。赤焼土器（31~34）は甕・坏が出土。坏は体部にロクロ痕を残し、底部の切り離しは回転糸切り（33）である。35は古錢で初鑄年1086年の北榮錢「元祐通寶」である。本遺跡は9世紀から11世紀の平安時代集落跡と推測される。

第12圖 包含層出土土器・古錢

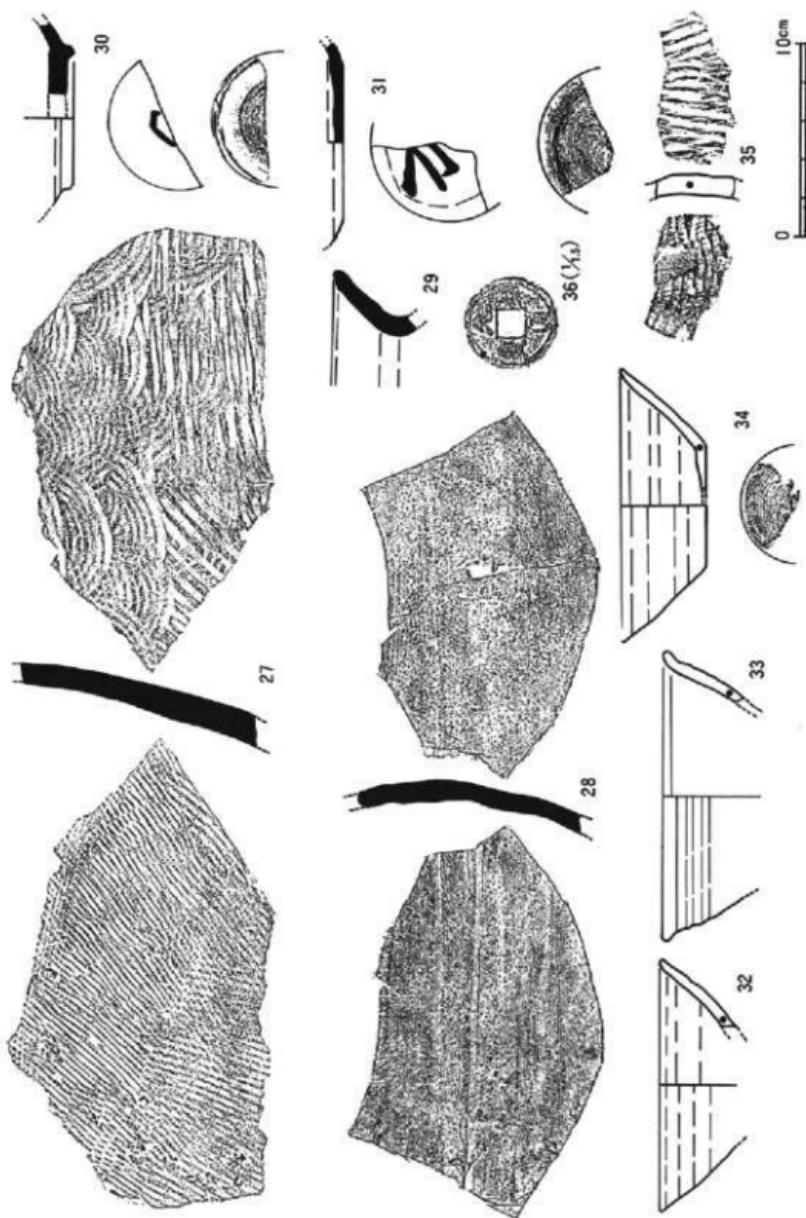


表-3 出土遺物観察表

排入	遺物番号	器種	計測値(%)			色調	胎土	焼成	底部切離	調査柱法・備考	出土点位置			
			口径	底径	器高									
第8回	1	須恵器	環	62	96	15	Hue 10Y 灰 白	7/1	粗砂混	堅	ヘラ切	クロロ底 墨書き有り・墨書き不明	S K36-F1	
	2		甕	228			Hue 5YR に5.5YR 灰	7/4	粗砂混	良		クロロ底	S K79-F2	
	3		甕		70	35	Hue 7.5YR に5.5YR 灰	7/3	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S K79-F2	
	4		甕	36			Hue 10YR 淡 黄 灰	8/4	粗砂混	良		クロロ底	S K79-F2	
第9回	5	土師器	甕	262	124		Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/4	粗砂混	良	静止系切	ハケ目・湖リ	S D77-F2 R P-1	
	6		甕	152		71	Hue 5YR 灰 白	8/2	粗砂混	良		ハケ目 外面に煤有り	S D77-F1	
	7		甕				Hue 2.5YR 灰	8/2	粗砂混	良		ハケ目 外面に煤有り	S D77-F1	
	8		須恵器	環	140	97	37	Hue 10Y 灰	6/1	粗砂混	堅	ヘラ切	クロロ底	S D61-F1 R P-4
	9		甕				Hue 10Y 灰	5/1	鐵 密	堅		ハケ目	S D61-F1	
第10回	10	赤陶土器	竹筒合環		68		Hue 10YR 淡 黄 灰	8/2	鐵 壓	良	圓転系切	クロロ底 ヘラミカキ(黒色化)	S D77-F2	
	11		竹筒合環	158	60	463	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/3	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底、外面、ナデ	S D77-F1	
	12		环	111	53	35	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2	
	13		环	145	60	37	Hue 2.5YR 淡 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2	
	14		环	152	54	45	Hue 7.5YR 黄 灰	8/8	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2	
	15		环	132	52	45	Hue 7.5YR に5.5YR 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2	
	16		环	135	58	49	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/3	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2	
	17		环	128	51	42	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/3	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F2 R P-3	
	18		环	130	54	43	Hue 7.5YR に5.5YR 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D77-F1	
	19		环	130		41	Hue 5YR 黄 灰	7/6	粗砂混	良		クロロ底	S D77-F2	
	20		环	140	50	46	Hue 5YR 黄 灰	7/6	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	S D25-F1	
	21		甕				Hue 10YR に5.5YR 黄 灰	7/2	粗砂混	堅		タタキ(条線状) アテ痕	S D77-F1.1	
第11回	22	須恵器	甕	146		55	Hue 7.5YR 灰	4/2	粗砂混	良		クロロ底 内外面に煤有り	S D77-F2	
	23		甕	136		53	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/4	粗砂混	良		クロロ底 内外面に煤有り	S D77-F1	
	24		甕	240		160	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/3	粗砂混	良		クロロ底	S D77-F2 R P-2	
	25		甕	164		62	Hue 7.5YR 淡 黄 灰	8/3	粗砂混	良		ハケ目 内外面に煤有り	S D77-F2	
	26		环		56	23	Hue 7.5YR に5.5YR 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底 系切り後にヘラ越し有り	S D77-F1	
	27		甕				Hue 10Y 灰 白	7/1	鐵 壓	堅		タタキ(筋子目状) アテ痕(条線内)	59-72-III	
第12回	28	須恵器	甕				Hue 5GY オリーブ灰	6/1	粗砂混	堅		クロロ底 外表面灰被り	69-94-III	
	29		甕				Hue N 灰	5/0	粗砂混	堅		クロロ底 胎土に小礫含む	59-79-III	
	30		高台环	73			Hue 2.5Y 灰 白	8/2	鐵 壓	堅	圓転系切	クロロ底 墨書き有り。墨書き不明	59-70-III	
	31		环		(80)	(6)	Hue 2.5GY 明オリーブ灰	7/1	鐵 壓	堅	ヘラ切	クロロ底 墨書き有り。黒書き万力	59-89-74-III	
	32	赤陶土器	环	130		40	Hue 7.5YR に5.5YR 黄 灰	7/4	粗砂混	良		クロロ底	60-69-III	
	33		环				Hue 10YR に5.5YR 黄 灰	7/3	粗砂混	良		クロロ底 内外面に煤有り	59-80-72-III	
	34		环	140	80	44	Hue 2.5YR 淡 黄 灰	7/4	粗砂混	良	圓転系切	クロロ底	59-80-69-III	
	35		甕				Hue 10YR に5.5YR 黄 灰	7/2	粗砂混	堅		タタキ(条線状) アテ痕	59-80-66-III	
	36		吉 鉢				初期1086年(光緒元年)北京					元祐通寶	貞 M 6 60-69-III	

第13図 遺構配置図



III 下長橋遺跡

I 遺跡の概観

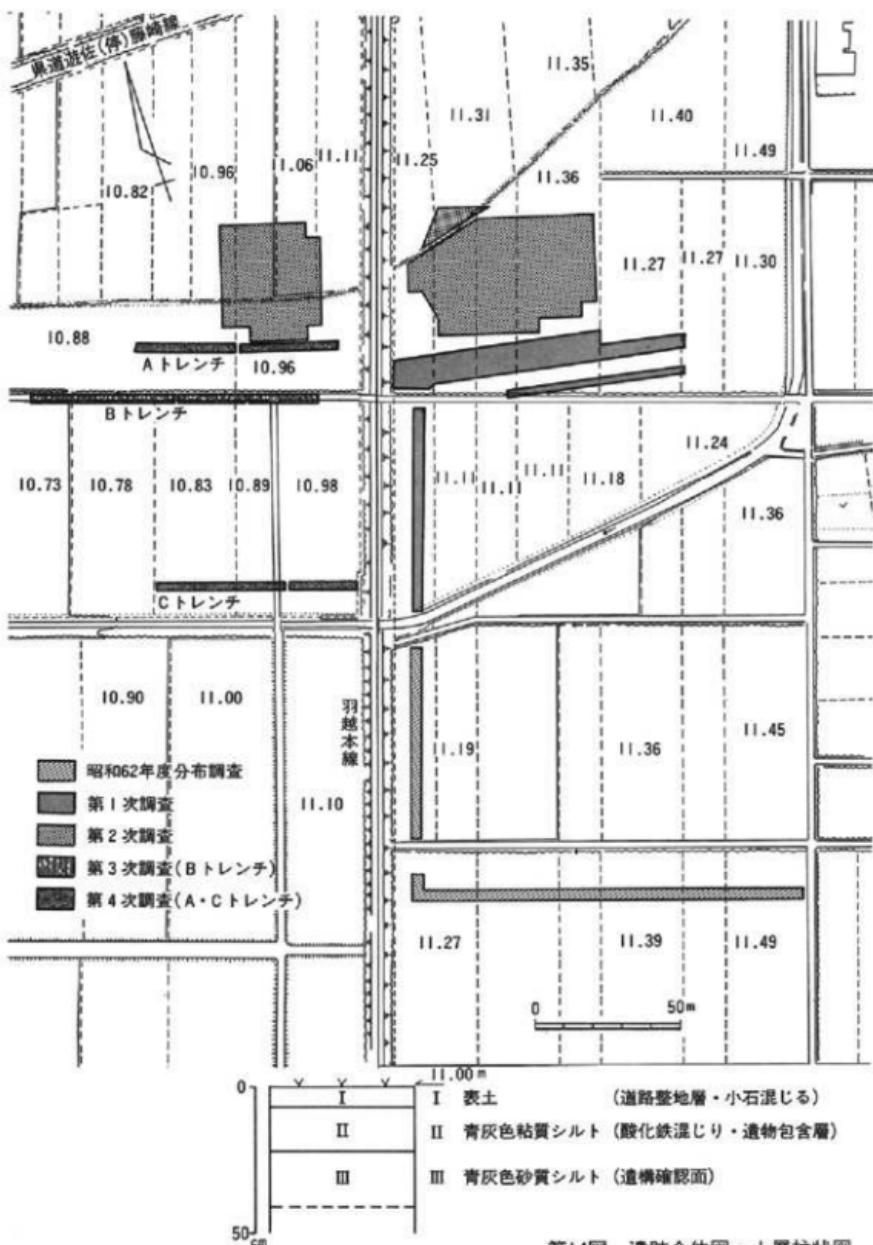
本遺跡は、山形県遊佐町大字小原田字村西他に所在する。一帯は、月光川左岸に広がる沖積地で、その中に隣接する形で数多くの遺跡が分布する（第1図）。遺跡は、JR羽越本線遊佐駅の南へ約800m、下長橋地区西側の水田に位置し、標高は約11mを測る。北に位置する小深田遺跡からは約1km、東に位置する浮橋遺跡からは約500mの距離である。

ここに昭和62年度から県営かんがい排水事業・月光川地区が実施されることになり、同年に分布調査及び緊急調査が行われた。その結果、東西300m・南北450mの遺跡範囲等が考えられ、それを基に関係機関と協議を重ね、今回その63年度事業区にかかる範囲について緊急発掘調査を実施することとなったものである。今年度は、県道遊佐（停）藤崎線八走路切除去工事、県営は場整備事業（月光川左岸地区）にかかる調査も行われた。便宜上、昭和62年度調査を第1次、同63年度県道分を第2次、今回を第3次（Bトレンチ）、63年度県道分を第4次調査（A・Cトレンチ）と区分する。

調査は、重機を用いた事業区域内に幅3m・長さ100mのトレンチを入れて行い、その中軸線はかんがい排水路線のセンター杭に合わせた。粗掘り後、順次面削りでトレンチを掘り進め遺構・遺物の確認、その位置確認や遺構覆土精査及び写真記録等を行なながら調査を進めて行った。記録については、隣接する調査区（第2～4次調査）との位置関係が相互に把握できるように、グリッド杭及び基準杭の配置関係を確認した。

遺跡の層序は、3つに分けられ、I層には農道整地の砂利が混じる、II層は遺物出土層で、III層は面削りの段階で遺構がみとめられ本トレンチの遺構確認面と考えられる。

遺構・遺物の分布については、確認数は少ないが検出頻度の高い地区はトレンチ中央と東側である。出土遺物もほとんどが、土壙（SK1・2）、溝跡（SD4）内出土である。



2 遺構と遺物

確認した遺構は、ピット11・土壤3・溝跡6で、建物跡等は未検出である。SK1~3は、トレンチ中央に位置する。それぞれ覆土は、12~18cmと浅い。SK1・2からは、主に赤焼土器がまとまって出土した。SD4は、トレンチ東端に位置し、その大半はトレンチ外である。調査は、覆土に入れた小トレンチ部分のみであるがRP12等の土器群が出土した。また、調査後日、トレンチ外南側から「王」と書かれた墨書き土器が工事中に発見さ

表-4 遺構観察表

M.別	平面形	風 模 (cm) 長径×短径、幅	深さ (cm)	壁の掘込状態	底面の状態	時 期	備 考	
SK1	長方形	200×101	18	緩やか	凹	平安	RP1~9出土	
SK2	楕円形	217×(93)	16	緩やか	凸	平安	RP10~11出土	
SK3	円 形	71×56	12	急傾斜	凸			
SD4		(160)	70	緩やか		平安	RP12出土	部分検出
SD9		19~21	9	急傾斜	凸			
SD10		14~57	4	緩やか	平	粗		

※ () 内数値は、部分検出計測値を示す。

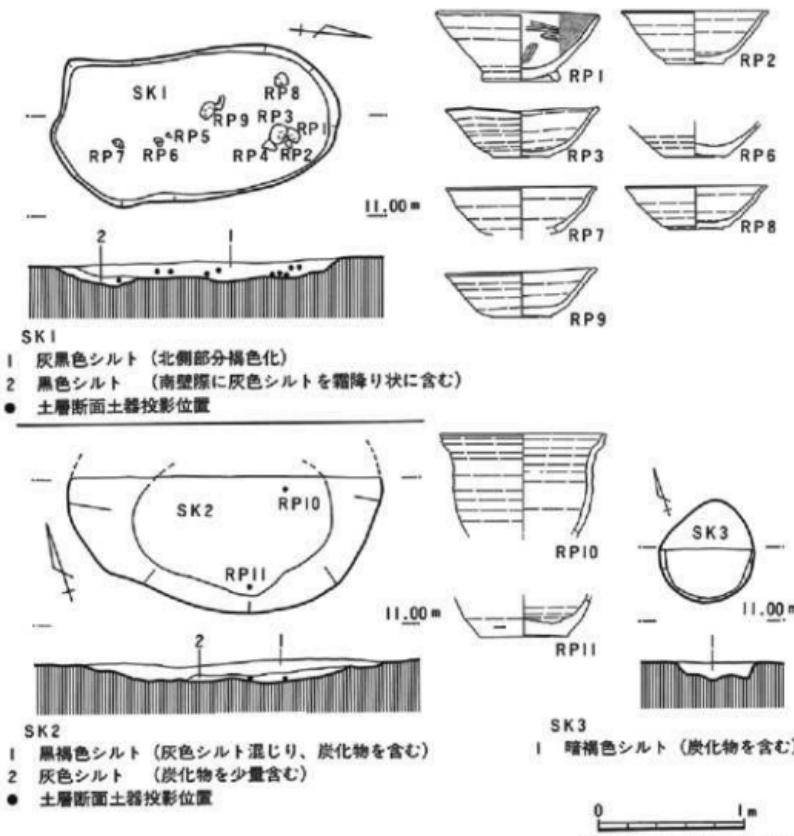
表-5 出土土器観察表

種別	博団 番号	回版 番号	器種	出土位置	法 量 (mm)		調 整		底 部	備 考	
					口径	底径	器高	外 面	内 面		
土器	17-1	13-1	高 台 环	SK1-F	140	66	57.5	ロクロナデ	ヘラミグサ 黒色施塗	回転系切り	RP1
		13-5	高 台 环	SK1-F				ロクロナデ	ヘラミグサ 黒色施塗		RP5 口縁部片
赤	17-2	13-2	环	SK1-F	126	48	45.5	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	RP2 赤部円錐状
	17-3	13-3	环	SK1-F	132	49	42.5	ロクロナデ	ロクロナデ	左回転系切り	RP3 亂毛を呈する
赤		13-4	旗	SK1-F				ロクロナデ	ロクロナデ		RP4 旗部序
	17-4	13-6	小形旗	SK1-F		55	(26.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	左回転系切り	RP6
赤	17-5	13-7	环	SK1-F	128		(40)	ロクロナデ	ロクロナデ		RP7
	17-6	13-8	环	SK1-F	121	47	38	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	RP8 赤部円錐状
赤	17-7	13-9	环	SK1-F	130	51	39	ロクロナデ	ロクロナデ	左回転系切り	RP9
	17-8	13-10	小形旗	SK2-F	142		(87)	ロクロナデ	ロクロナデ		RP10
土	17-9	13-11	旗	SK2-F		75	(32)	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	RP11
	17-10	14-6	环	SD4-F	129	49	47.5	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	
土	17-11	14-7	环	SD4-F	130		(41.5)	ロクロナデ	ロクロナデ		
	17-12	14-4	环	SD4-F	130	54	43	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	
土	17-13	14-3	环	SD4-F	130	48	(36)	ロクロナデ	ロクロナデ	左回転系切り	
	17-14	14-1	环	SD4-F	128	56	43.5	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	RP12
土	17-15	14-5	环	SD4-F	131	55	46	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	
	17-16	14-2	环	SD4-F	135	60	51	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	
土	17-17	14-8	环	SD4 南脚	132	55	52.5	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	墨書き「王」 トレンチ外出土
	17-18		环	Bトレンチ-II		50	(26)	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転系切り	底部凹盤状を呈する

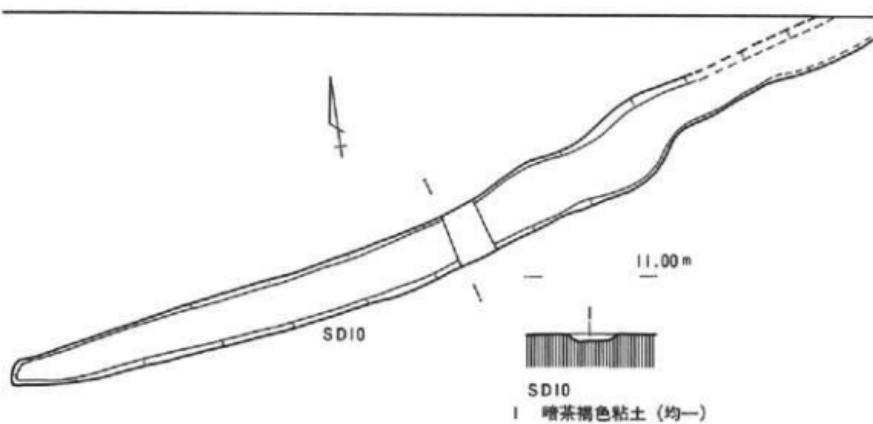
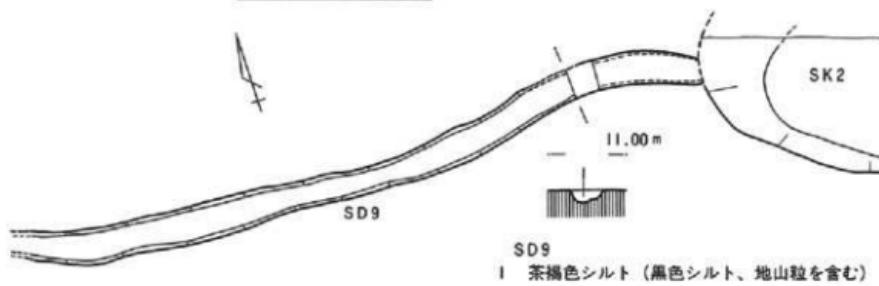
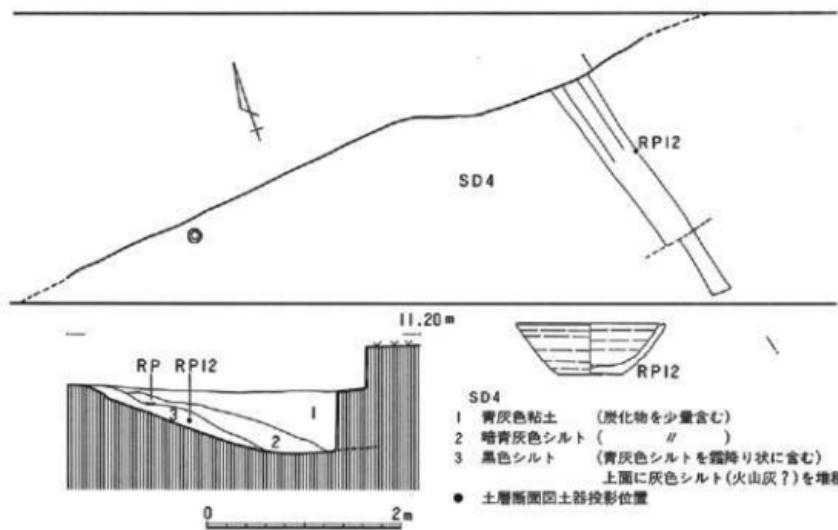
※ () 内数値は、残存部及び推定計測値を示す。

れ、溝の延長部出土と考えられる。

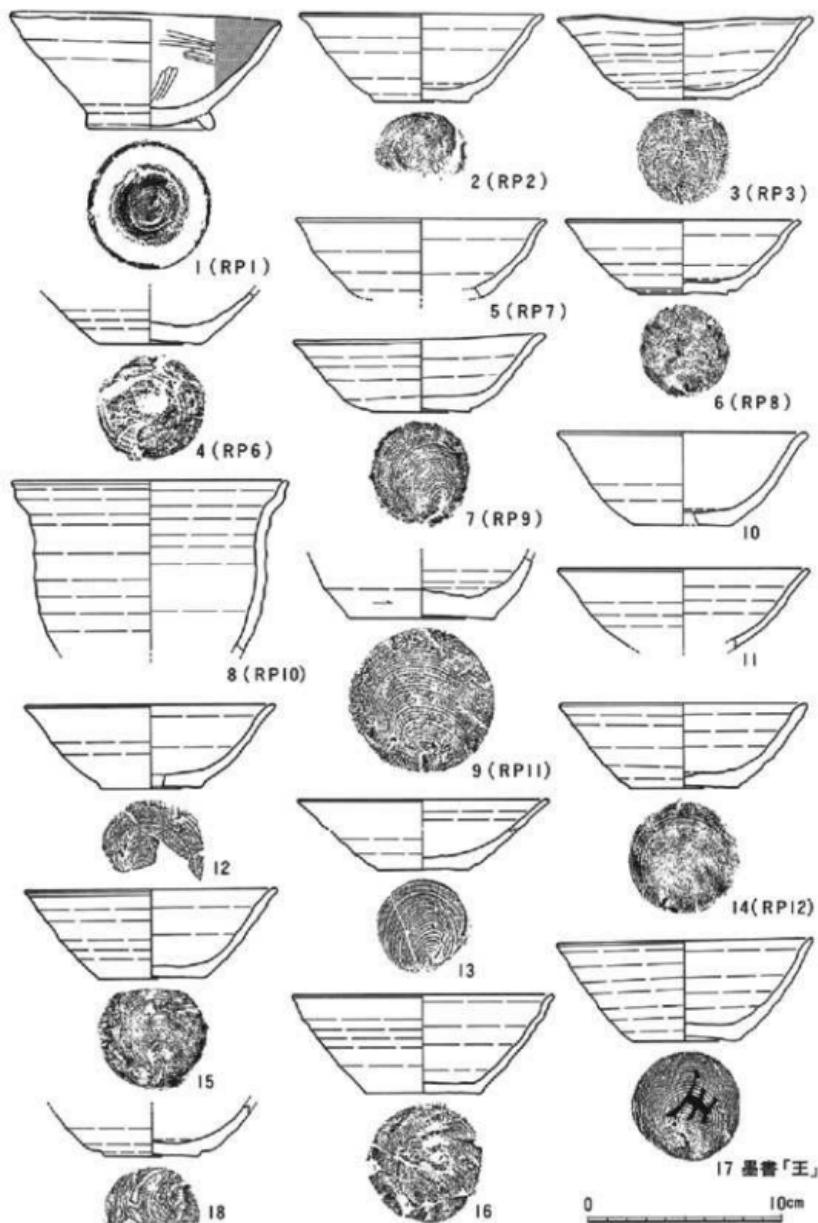
出土遺物は、ほとんどが破片資料で整理箱約2箱と少なく、種別は、土師器・須恵器・赤焼土器で、うち赤焼土器が最も多い。土師器は高台付壺で赤焼土器より少しあり法量が大きい。赤焼土器は壺・甕・壠である。壺は器高4cm内外と5cm大のものに分けられる。底部は、回転糸切り離して左と右回転がある。また、底が外周の内側から円盤状に出るものがありロクロ成形の工程が推定される。甕は、底部平底の小型のものと、丸底（体部片からの推定）で体部下半にタタキを行なうものがある。須恵器は、SK2から壺底部がみとめられる。切り離しは、回転糸切り無調整である。時期的には、赤焼土器を主とする遺物の内容から平安時代（10C代）が考えられる。



第15図 造構実測図(1)



第16図 遺構実測図 (2)



1-7 : SK1出土 10-16 : SD4出土
8+9 : SK2出土 17 : SD4南側出土

第17図 出土土器実測図

IV まとめ

今回の調査は昭和63年度県営かんがい排水事業（月光川地区）に係る小深田遺跡、下長橋遺跡の緊急発掘調査である。調査期間は小深田遺跡が延29日間、下長橋遺跡が延9日間、調査面積を小深田遺跡1,980m²、下長橋遺跡300m²である。両遺跡共に事業計画幅内に係る区域を調査し、遺構・遺物を検出した。検出された遺構は、溝状遺構・土壙・柱穴等である。これらの遺構には時期を示す土器片やその他の遺物が含まれ、遺構の性格も確認されている。小深田遺跡での遺構内からは墨書き土器や、甕、壺、塙等の土器片が出土し、平安時代の生活がうかがえる。また小深田遺跡のS D77溝状遺構より出土した土師器は、他の遺構や下長橋遺跡出土の土器より先行するものと考えられ、平安時代でも初期段階の土器として位置付けされる。従って小深田遺跡は9世紀から10世紀、下長橋遺跡は10世紀代と考えられる。

参考文献

- 山形県教育委員会「分布調査報告書（15）」山形県埋蔵文化財調査報告書第119集 1988
- 山形県教育委員会「小深田遺跡調査説明資料」 1988
- 山形県教育委員会「小深田遺跡第2次調査説明資料」 1988
- 山形県教育委員会「下長橋遺跡第2次調査説明資料」 1988
- 山形県教育委員会「下長橋遺跡第3次調査説明資料」 1988
- 山形県教育委員会「下長橋遺跡第4次調査説明資料」 1988

図 版



遺跡遠景 (南から)



遺跡近景 (東から)



調査区設定



調査区全景（北半部）



調査区全景（南半部）



調査風景



遺跡の層序



遺構検出状況（全体）

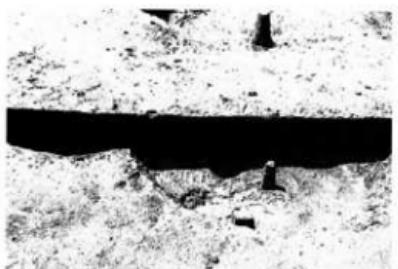
図版 4



S K 60 土壙



S K 65・66 土壙



S K 68 土壙



S K 79 土壙



S K 80 土壙



S D 77 溝跡



R P 1 遺物出土状況



R P 2 遺物出土状況



R P 3 遺物出土状況

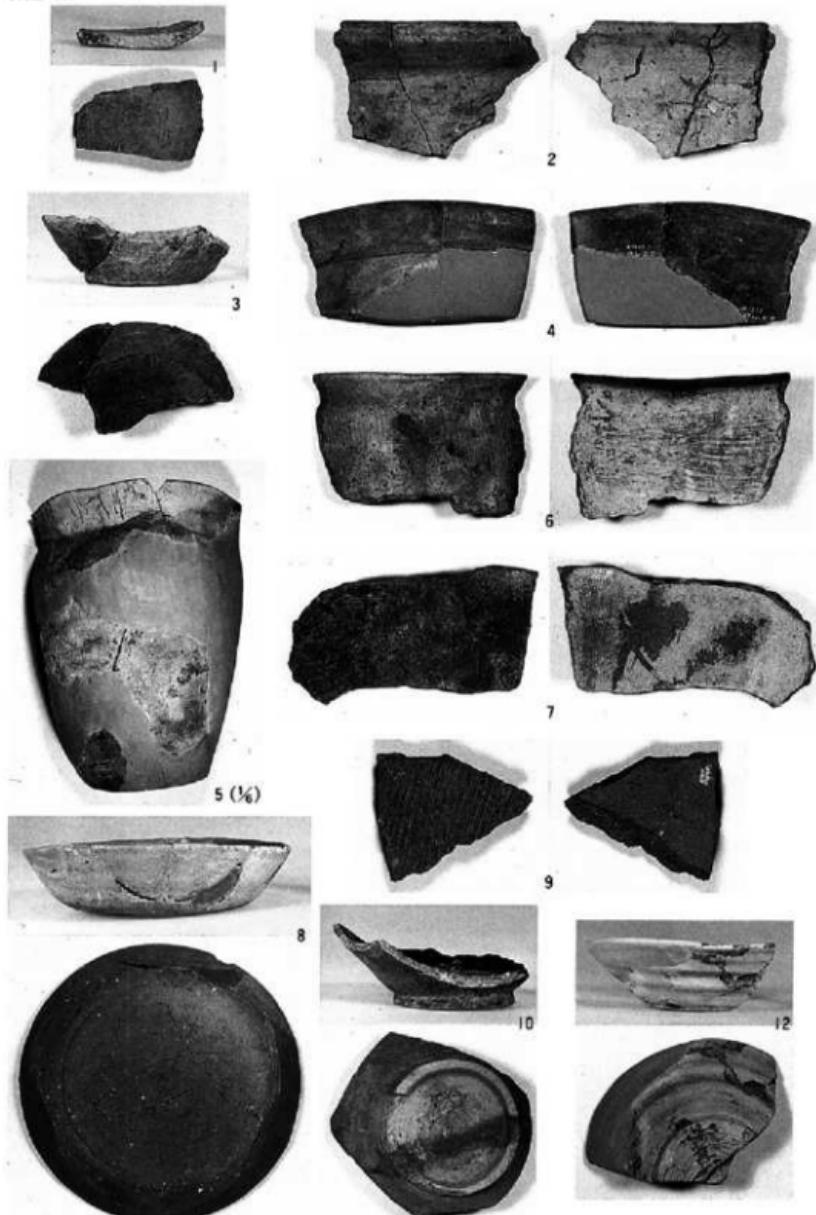


R P 4 遺物出土状況

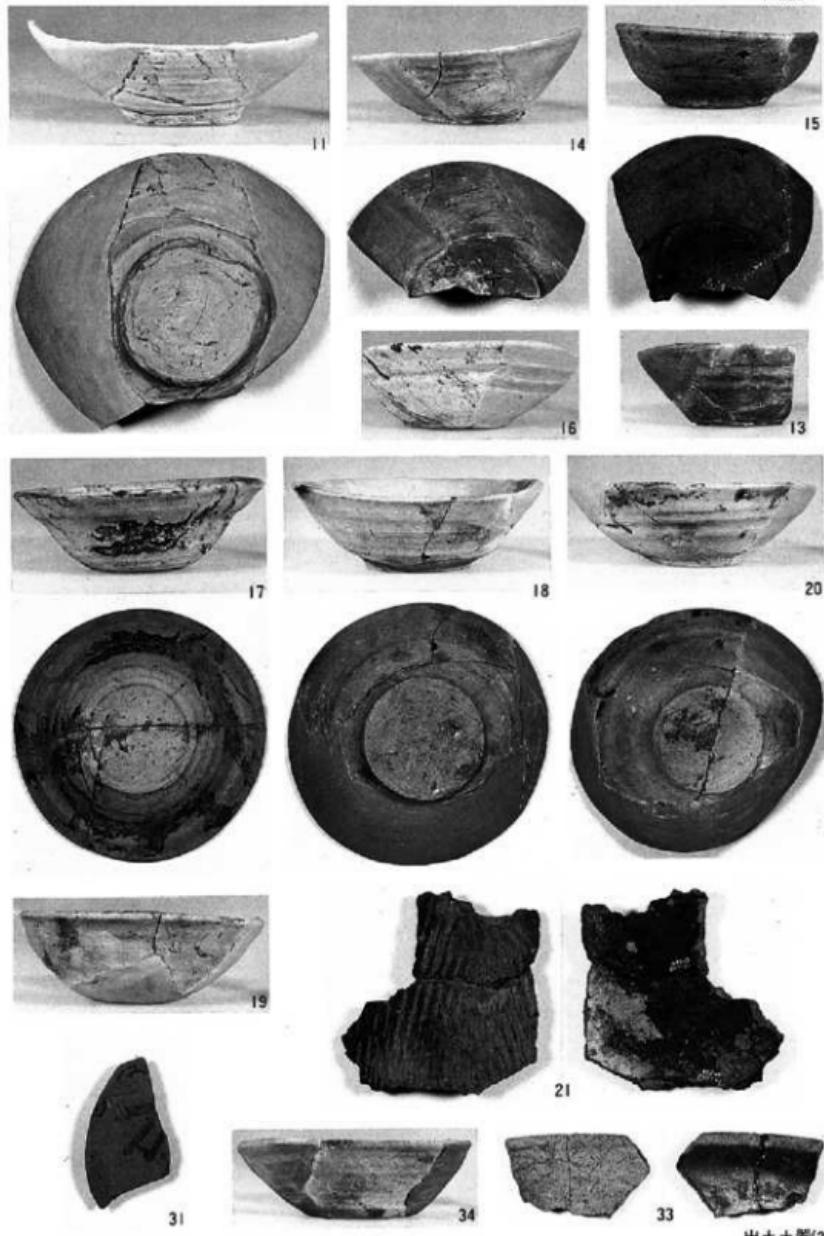


窯場状況

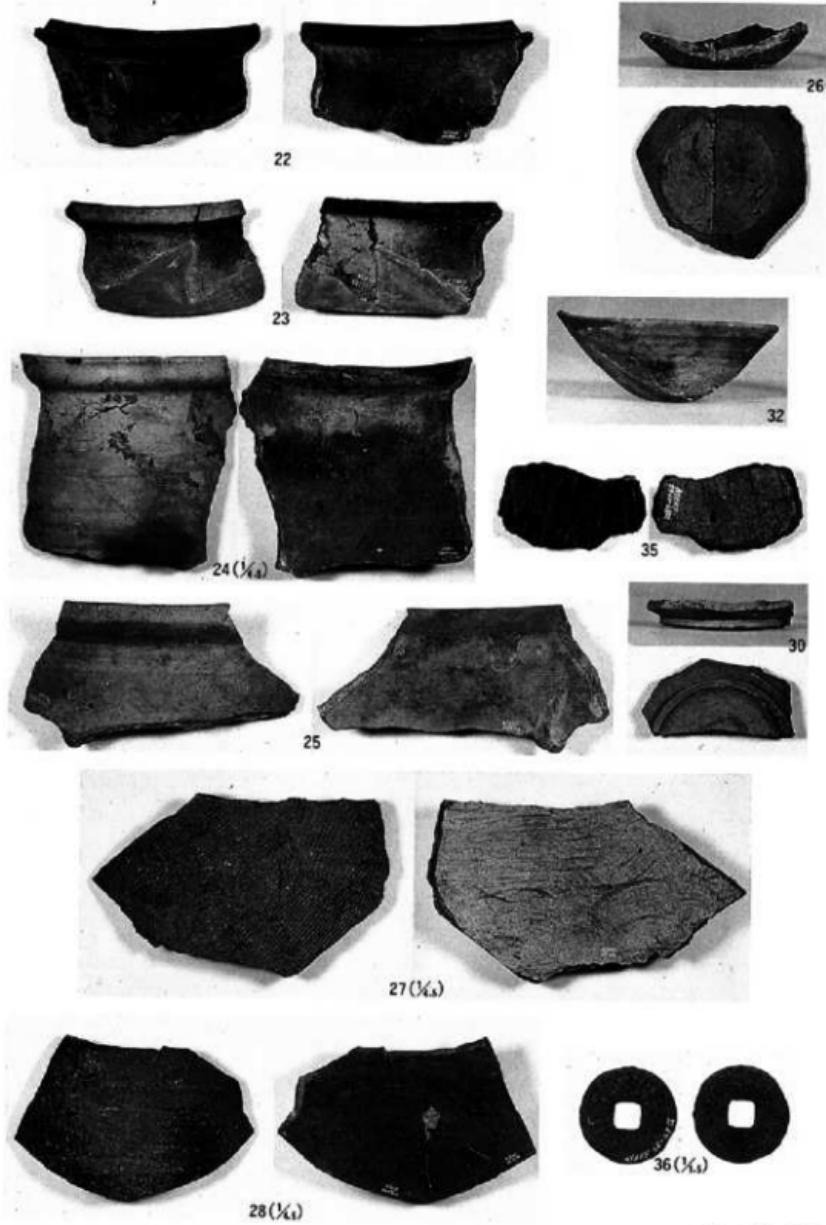
图版 6



出土土器(1)



図版 8



出土土器・古錢



遺跡遠景 (南西から)



調査前状況 (北西から)



調査前状況 (東から)



トレンチ調査状況 (東から)



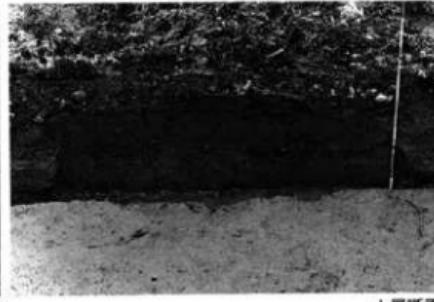
調査トレンチ (SD4付近)



調査トレンチ (SK1付近)



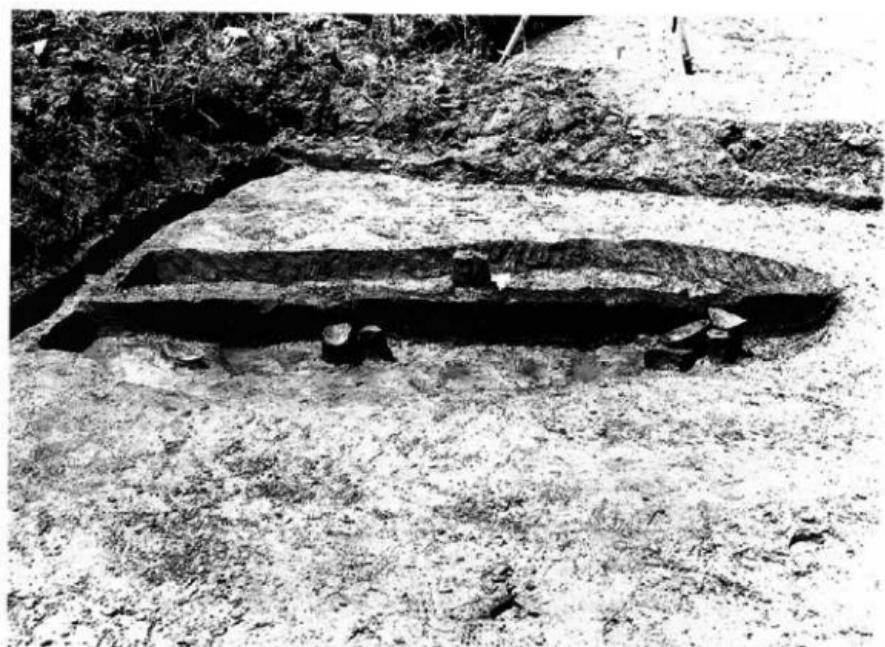
調査トレンチ (西から)



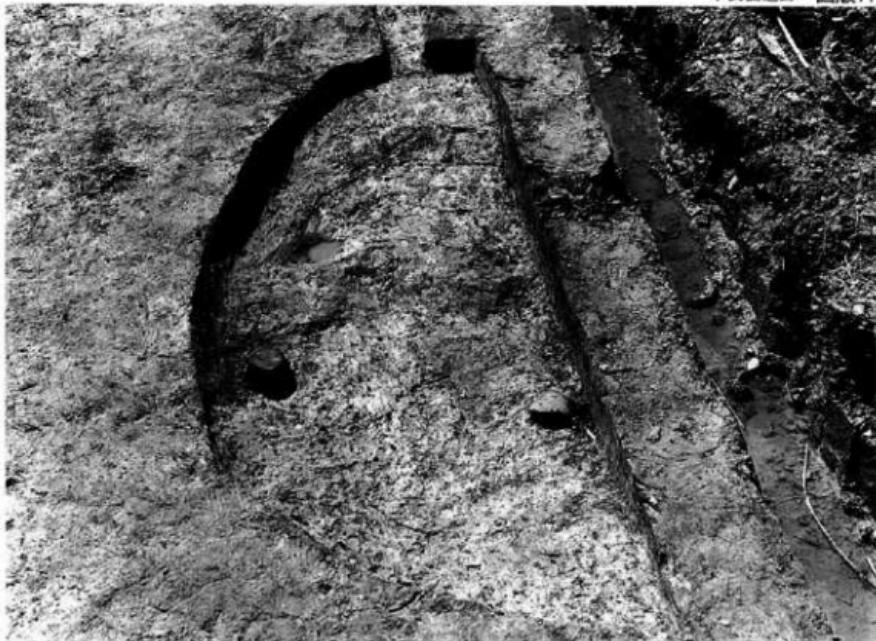
土層断面



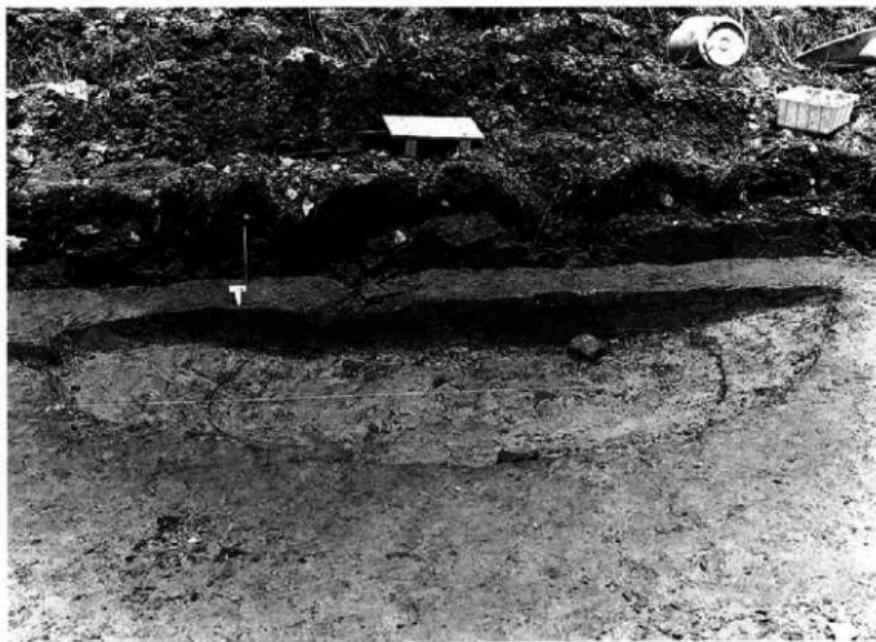
SKI



SKI 土層断面



SK2



SK2土層断面



SD4



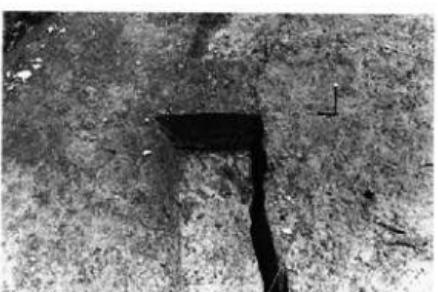
SK3



SD4 土層断面



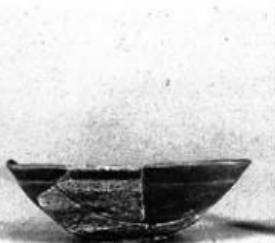
SD9



SD10



1



2



3



4



5 (外)



(内)



6



7



8



9



10



11



(底面)
出土土器(1)



1

2

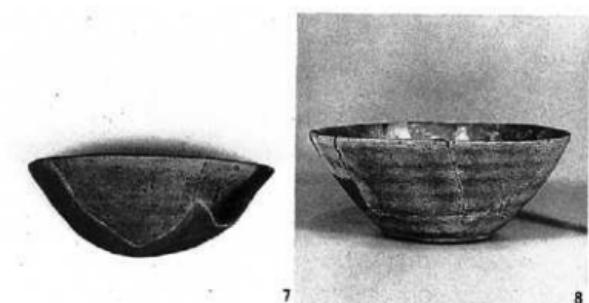
3



4

5

6



7

8

(底部)



墨書き「王」
出土土器[2]

山形県埋蔵文化財調査報告書第142集

こ ふか だ しも なが はし
小深田遺跡・下長橋遺跡

発掘調査報告書

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 山形印刷株式会社
